

私はモルモット IV

——学生による授業評価'95, 実施報告——

鳥居元宏

——はじめに——

平成8年2月に文部省が出した教育白書『我が国の文教施策, 新しい大学像を求めて—進む高等教育の改革—』を読むと, これが日本で一番保守的だと云われているお役所の提言かと思われるほど新しい(或る意味では当然のことなのですが)考え方が見られます。第2章『大学が変り始めた』第2節『大学で何を学ぶか』の中では, 「授業の質を高める為の工夫が必要である」と説き, その具体策の例として, 「授業計画(シラバス)の作成・公表」「小人数教育の拡充」「ファカルティ・ディベロップメントの実施」等と共に「学生による授業評価」が, 平成6年現在, 全大学の約2割に当たる138大学において取り入れられていることをあげています。また, 「ファカルティ・ディベロップメント(授業内容・方法を改善し, 向上させるための組織的取組)」の具体例として「教員相互の授業参観の実施」を第一に上げています。これは従来の大学を支配して来た「他人の授業には口出ししない。その代わりに自分の授業にも口出ししてくれるな」という考え方は, 最早通用しないことを意味しているのではないのでしょうか。

大学を良くしようとするには, まず第一に授業の質を高めることが大切です。その為には, 自分の授業がどの程度のものかを知る必要があります。「ファカルティ・ディベロップメント」も「学生による授業評価」も, 授業水準を知る大切な手がかりとなります。授業内容を向上させるということは授業を変えるということですから, 勿論,

授業の目的, テーマ, 狙いを変えるのではなく, その方法, より判かりやすくする為の工夫, 教材の使い方, 説明方法, 教員の熱意, 話し方等を変えるということは当然です。目的, テーマ, 狙いを変えてしまっただけでは学科全体のカリキュラム体系に影響が出てしまひよくありません。尤も, 逆に変えなくては機能しない授業もあるようですが…。

去る4月1日の学科長・学科長補佐の辞令交附式の挨拶で深田尚彦学長は, 「(大学冬の時代を迎えて) 職員の方々はかなりの危機意識を持っているのに, 肝腎の現場に立つ教員に危機意識が薄いようだ」という意味の御発言がありました。

残念乍ら, 危機意識を持つどころか, これまでの担当授業のコマ数と内容をいかに変えずに守るかに腐心しているのが教員の現状です。学長の御指摘が私には痛いほど判ります。ささやかですが私も, 雑談や酒席などで危機感を持つよう訴えているのですが, 最も伺って頂かないといけない中堅の先生方はまるで馬の耳に念仏, 逆に非常勤の先生方に緊張感が高まっています。やはり実社会で活躍しておられる方々には周囲を見る目があるので大学の危機的現状が見えるのでしょう。これから潰れるのは銀行, 病院, 大学だそうです。縁あって末席にいる以上, 大阪芸大だけでは潰したくありません。その為到我々教員の出来ることは, 良い授業を学生に提供することしかないと思います。

授業の質を高める為には, 担当授業のやり方を思いきって変えてみることではないのでしょうか。やってみなければ何も始まりません。勇気を持って行動することです。

どう変えるかは『教員相互の授業参観』、そして『学生による授業評価』が指針を与えてくれます。

学生による授業評価のレポートを紀要に載せて頂くようになって4年、地味で目立たない試みかもしれませんが、良い授業とは何かを求めてまだまだこの調査を続けるつもりです。私の調査に関心を持って下さっている或る幹部職員の方が大阪経済大学の授業評価についての資料を提供して下さいました。こうした御支援には大変勇気づけられます。何らかの形で今後の調査に反映させて行きたいと思います。

——第4回の調査——

平成7年12月12日、5時限、これ迄と同様『映像演出論』の授業に於いて、第4回の授業評価を行いました。

調査票は昨年と同じ物を使いました。昨年の集計結果と比較してみると何か掴めるかもしれないと思ったので2年続けて同じ物を使うことにしたのです。『芸術18』、212頁に掲載してある資料①がそれです。御参照下さい。

平成7年度の受講登録者は129名、当日の出席者は63名、出席率48.8%、出席者が少ないのが気になります。冬期休暇を控えた12月12日という日程が良くないのか、とも考えたのですが、後日学年末試験を行ったところ、試験の出席者が79名、登録者の61.2%しか受験していません。出席簿で全授業の出席者数を調べてみたところ、最高で83名、最低が53名、平成7年度は全体に出席率が低く、登録しながら一度も出席していない者が14名、出席が3回以下という者が14名もいました。これはどう解釈したらいいのでしょうか。初めから^{かてうま}当馬で登録したのか、開講が5時限目なので出るのが厭になったのか、私の授業に魅力がなかったのか、一度も出て来ない者は問題外としても、一、二回は出席している者を授業に引付けることが出来なかったのは残念でなりません。こうした学生を出席したいという気持ちにするのが本当に魅力ある良い授業なのではないでしょうか。いずれにせよ、大きな反省点です。

——調査結果の集計と分析——

調査結果の集計は、前三回と同様、研究室の副手諸君の手を借りました。資料①が集計結果です。私なりに分析し解釈してみることにします。

I. 授業評価について。

問1では、78%が必要と答え不必要は0。昨年は必要が68%、不必要が6%だったので授業評価を必要と考える学生がかなり増えており、問2の必要な理由も「送り手と受け手のキャッチボール（意志の疎通）で、どちら側もより高次の授業が得られると思う」「授業に不満を持ったまま単位のために出席するという態度はためにならない」「おれの有難い話を聞け」という傲慢な先生が多い。教授・助教授と云った肩書きに胡坐をかいている様な先生こそ（授業評価を）やるべきだ」等、かなり真剣な、突っ込んだ意見が見られ、学生も良い授業を求めていることが窺われます。ただ、「毎年同じ内容の授業には疑問を感じる。生徒の意見や時世に即応した内容にすべきだ」という意見があったのが気になります。昨年もこの授業を受けた再履修の学生かと思われませんが、物事の基本・基礎はそう簡単に変るものではないので、何年たとうが同じ話をしなくてはならない部分も講義の一部にはあるのだということを知った上でのことかどうかが問題になります。1+1は永遠に2なのであって、それを昨年聞いたから3にしろと云うのであれば無理な屁理屈、ただのイチャモンです。“また同じ話か”と思うと同時に“何故同じ話が毎年出て来るのか”という疑問を感じ、その理由を突き止めるべきです。教師の怠慢で同じ話が出て来る場合もあるでしょうが、それが大切な基本・基礎なので意図して同じ話をする場合もあるということを知るべきです。その辺りを区別する知力というか、判断力は持たないといけません。毎年同じ話をする、だから教師が怠慢だと即断することは出来ないと思います。

II. この授業について。

問1~3は総て評価3以上が90%を越えており大体において意図通りに授業を進めることが出来たようです。

問4のみが評価3以上が78%とやや低いのですが、これは私の語り口があまり講義調ではなく、雑談的というか、学生に語りかけるように話していることと無関係ではないと思います。いかにも講義だという語り口にすれば勉強しようという雰囲気は保たれるでしょうが退屈さも強まってきます。この辺りのバランスが難しいと思います。

問5の授業の良い点では、「1. 丁寧でわかりやすい」「2. ポイントを押さえている」「3. 基礎的なことから説明する」「4. 説明が体系的」「8. 雑談やエピソードが面白い」「9. 熱意がある」「10. 授業にメリハリ」「11. 人柄や授業に親しみ」「12. 口調が明瞭」の9項目が高く評価されているのに「5. 内容に深み」「6. プリント・参考文献が効果的」「7. ビデオ・スライド・OHPが効果的」の3項目が低いのはこの4年間ずっと変わらず、私の授業の最大の欠点でお恥ずかしい限りです。ただ、プリントの配布を必要最小限にとどめているのは、学生に出来るだけノートを取らせたいからです。他人の話を聞いて要点を聞き分けたり、周囲の出来事の中に意味を発見したりする観察眼は演出家としてどうしても必要な能力です。この授業を通して、演出の知識をつけるのは勿論、演出以前の観察眼や物事をまとめる能力をつけさせることを狙っているからです。あまりプリントを配るとそれに頼ってしまって、ノートも取らず、こうした能力はつかないでしょう。平成8年度はオリエンテーションでこの辺りを強調し、副次的効果もあるのでプリントの配布は少ないから必ずノートを取るように予め話しておきました。「13. その他」の記述は3つとも私にとっては大変嬉しいことで、大いに勇気づけられます。

授業の悪い点では、「3. 説明がくどい」「6. 関連事項が少ない」が、17%、23%とやや高いですが、それでも23%が最高で他は10%かそれ以下なので比較的學生には評価されていると取るのは我田引水が過ぎるでしょうか。ただ、「14. その他」の記述の中に「生徒のモラルの無さに気付いて欲しい」「自慢話のように聞こえる時がある」というのがあったのが気になります。「生徒のモラル……」が、具体的にどういうことを指しているのかこれだけでは判かりませんが、教室を出たり入ったりしたり、私語をしたりして真剣に受講しようという学生の邪魔に

なると云うことではないかと推測します。この辺りのことは大変難しいことで、片岡徳雄・喜多村和之編『大学授業の研究』では一章をさいて武庫川女子大の島田博司氏の『授業中の私語』という研究を掲載していますし、浅野誠氏著『大学の授業を変える16章』でも『受講マナーをよくするには——私の作戦』という研究に一章をさいていますし、森田保男・大槻博共著『実践的・大学教授法』でも『私語に対して警告音を発する試み』とか『クラスコンダクトの実例』の中で『私語』を取り上げていますが、私の読んだ限りではどれも決定的な決め手を与えてはくれませんでした。そればかりか、島田氏は『(私語は)現代日本の高等教育風土の中で社会問題化しつつある』と指摘しており、A女子大という匿名の大学での調査結果が発表されています。それによると『自分が私語をしている時、学生本人に自覚があったかどうか』という設問に61%の學生が『自覚がある』のに私語をしたと答え、21.8%の學生は私語をしている『自覚がない』と答えています。そのくせ『周囲に私語をしている人がいた時、學生はどう感じたのか』という設問には、『うるさい、静かにして欲しい』が49%、『腹が立つ、いらいらする、うっとうしい』が37%もいます。この2つの結果を関連づけると、他人の私語にはうるさい、腹が立つ等と感じ乍ら自分は私語をしているということになり、今の學生がいかに自分勝手に自己中心のかという姿が浮び上って来るのではないのでしょうか。こうなると、私など茫然とせざるをえませんが、「マナーの無さを知って欲しい」と訴えた學生の切実な気持を考えると放置するわけにもいきません。一つ考えていることがあるので今年の授業でやってみます。結果は来年度のレポートで報告したいと思っています。「自慢話に聞こえる」ことがあるという意見は意外でした。そんな気はまるでないのですが、そう聞こえたとすれば注意しなくてはなりません。

Ⅲ. 教師・履修科目の全体評価では、問1の「教育効果はあるか」には90%が評価3以上と答え、しかも評価4以上が68%もあったのは、問題点はあるものの教育効果のある授業だと見ていいと思います。問2の「履修に値するか」という設問は、89%が評価3以上、そのうち40%が評価5と答えているのは、担当者にとっては大変

嬉しい限りですが、深読みすれば、私の授業が良いというよりも他の授業が低水準すぎるので、それほど高水準でもないこの授業が殊更良く見えるということもあるかと思いますが、思いすごしでしょうか。この辺りは個人の調査の限界で比較対象がないので正確な判断は出来ません。ただ、多摩大の資料によると、同じ設問で評価3以下が50%という授業があるので、学生の出した数字を素直に受取っておいて良いのかもしれませんが。問3は、学生の受講態度を問う設問です。「1. 真面目に聴講」が41%とかなり高いのに比べ、「2. 寝ていた」「3. 私語していた」「4. 出席カードを書きに来た」が9%、9%、4%と低いのは比較的的真面目に受講している学生が多いことになるわけですが、昨年同様今年もまた「5. その他」が48%と一番高く、半分近い学生が選択肢にない受講態度だということになります。選択肢が適切でないのか、或いは学生の態度が曖昧なのか、判断に迷います。この辺のことを何人かの学生と話し合ってみたのですが、その日の気分を受講態度が変わるらしいということが判りました。毎週同じ態度で講義にのぞめというのは無理かもしれませんが、授業を中心に一日を生きるのではなく自分の気分次第で生きているというのは何やら心もとない気がします。何よりも自由を大切にするのが本学の校風ですが、その前提には当然、自己規制と自己責任があります。自分で自分をコントロールして学生としての生活態度を決めるのは当然のことにように思えるのですが、その日その日の気分次第でフワフワと流されるように生きているのは何とも危険だし、1460日しかない大学生活という貴重な時間を浪費していると思えません。何とも勿体ない話です。問4は出席率を問う設問ですが、79%が70%以上出席としています。これは昨年とはまるで違う結果で、昨年は70%以上出席は46%しかなく、50%が出席10%以下としています。年度により学生の気風が違うのは当然でしょうが、あまりに違う結果が何を意味するのか気になります。因に79%が70%以上出席という数字は私の出席簿と大差ありません。問5のアンケートの設問の適否を尋ねる設問では、評価3以上が84%で昨年の82%と大差なくマアマアの設問設定だということになるかと思えます。

IV. 授業を良くする為の自由な意見では

「外部の監督を招いての講義は久々にエキサイトしたので、もっとやるべきだ」というコメントがありますが、これは、私の脚本（筆名、飛鳥ひろしで執筆）を予め読ませ、その映像化作品を上映した上で演出した監督を招き、脚本と演出の係わりについて私と対談、後半は学生も混えたディスカッション形式の授業を試みた時のことです。私は脚本・演出を兼務するので一人でやることも可能なのですが、脚本家は脚本家、演出家は演出家と守備範囲を明確にした方が理解しやすいと考えたのでやってみたのですが、聴講に現れた先生もあり、学生の評判は悪くなかったようです。やはり、ちょっとしたことでこうした工夫は大切なようで平板になり勝ちな授業に変化を与え活性化の要素になるようです。今年も同じ形の授業をやるつもりですし、他にもアイデアがあるので順次実現して行くつもりです。「『こうしては駄目』『これは失敗』と云った否定的な言葉が多いような気がする。これでは無知な我々が鵜呑みにしてしまう危険があるので、もっと先生の頭を柔らかくして下さい」という意見がありますが、良いものを良い、悪いものを悪いと云うのが体験論的講義で、それを聞き分けるのは学生の力量、頭を柔らかくするのは学生の方でしょう。「授業内容を確認する意味でも、小テストをやって欲しい」という意見と関連づけて考えてみると、与えられた固定化した知識を丸暗記するのが勉強だと思込んでいる受験勉強型学習法しか知らない学生の姿が仄見えるような気がします。昨年の調査結果にも現れていたのですが、仲々結論（正解はこれだ）を出さない私の講義に学生達もどかしさを感じている証拠でしょう。こういう問題がある、正解はこれだから覚えておけという“正解にたどりつく思考プロセスを端折った授業”をすれば学生は納得するでしょうが、それでは映画演出（芸術創作と云ってもいいでしょう）は講述出来ません。問題を整理して、結論にたどりつくであろう選択肢を自分で設定、それを一つ一つ潰して行って結論に到達するという思考プロセスこそが大切なのであって、問題点と正解を直結させて鵜呑みにする方法は危険、私はやりたくありません。東大教養部の助教授を中心とする中堅の先生方が『知の技

法』『知の論理』『知のモラル』、所謂知の三部作を書いた
気特が判る気がします。知の三部作こそ、この辺りの思
考プロセス（大学での勉強の方法）を説いているからで
す。うちの学生達にも是非読んで欲しいところです。

今年もまたプリントの配布を求める声がありますが、
これは設問Ⅱの間5で書いた通りやるつもりはありません。

「演出法をその場で実習演習できるようにして欲しい」
という希望がまたまた出ています。やはり『映画演出演
習』と云った科目の開設は急務なようです。然し、この
科目を担当出来る人材は限られており、こうした人材は
（私も含めて）既にコマ数は満タン、その上、実技系大
学院の開設もありスケジュールはパンク状態、我が学科
は人材不足です。

V. 学生番号・氏名の記入。

今年も昨年の82%を上廻る86%の学生が記入してくれ
ています。昨年も触れましたが、芸術作品は自己表現、
自己主張です。堂々と氏名を公表して成果を問うのは当
然です。芸術を志す学生としては当り前の姿でしょう。

——集計結果の報告と反応——

今年も『映像演出論』の最終授業で集計結果のコピー
（資料①）を配布、私の分析、感想を話しました。

4回目ともなると“あの先生はこんなことをやる”と
いう噂がかなり徹底して来ているのか、学生もあまり珍
しい顔もしませんしこれと言った顕著な反応はありません
でした。然し、その日の出席カードの裏のメッセージ
に、今年もまた「他の先生にも授業評価をやるよう進め
てほしい」「云いたいことのある先生は他にいます」と書
かれていました。

冒頭に示した文部省の教育白書『我が国の文教施設』
が、わざわざ『新しい大学像を求めて——進む高等教育
の改革——』という特集を組み、その中で「大学教員の
教育能力の向上」を少々煩いくらいに訴えているのは、
とに角、今の俣ではいけないということです。勇気を出
して自分の授業を変えることを考えてみようではありませんか。
その為の手がかりは『学生による授業評価』で

得られるのですから……。

——まとめ——

前回から調査票を変えました。今回は、前回の結果と
の比較が見たかったので、前回と同じ調査票を使いま
した。今回は、設問の巾を広げすぎ、回答が散り焦点がぼ
けたように思われたのですが、今回の結果を見ると、そ
うでもなかったようで仲々有益な示唆・指摘が読み取れ
ました。来年もう一度使ってみてもいいのではという気
になっています。ただ、御提供頂いた大経大の資料を見
ると、私が行っている“個々の授業に対する学生の評価
を求める調査”の他に、“学部全体、学科全体の平均的・
全般的評価を知ることとする調査方法”もあることを知り
ました。この方法だと、学部・学科・コースの全般に係
わる共通の教育課題に関するデータが得られ、担当教員
が自分の教育の改善資料とする調査とは違った、もう少し
巾を広げた結果が得られそうです。次は、この方法で「映
像学科の授業全般の評価」を求めて、私個人の評価と比
較してみるのも参考になるかもしれません。念の為一言
申し添えますが、個人名が出るような設問は一つもあ
りませんので他の先生方に御迷惑をかけることはありません。

平成9年度にはカリキュラムの改革が行なわれます。
改定に対する教務委員会の検討課題は既に出されています。
然し、どれほど立派なカリキュラムを作っても、カリ
キュラム全体を構成する一つ一つの授業を担当する教
員が、その授業が全体の中で何を目的として設置されて
いるのかを十分に理解した上で万全に材能させるよう
に実施しなくては、意味がありません。そして万全に材
能しているかどうかを知るには「学生の授業評価」が有
効です。教務委員会の検討課題の中にも「学生の授業評
価制度の導入」という項目が入っています。これまで以
上に「学生の授業評価」の持つ意味は大きくなると思
います。このカリキュラム改定は、芸術系大学・学部の
新設ラッシュに対抗する為のものであり、大学冬の時代
を生き抜く為のものであることは明らかです。将来を考
えると「学生の授業評価」は必要不可欠な一要素になりそう

なので、より効果的な方法を探りつつ今後も続けて行くつもりですので、どうか御支援下さい。

4年前、この調査を始めるに際して、調査票の使用を許可して頂き、貴重な集計資料までお送り頂いた多摩大の中村秀一郎先生が体調を崩されていらっしゃるようで気がかりです。お見舞申し上げます。

最後に、集計作業をしてくれた副手諸君、調査に参加した学生諸君に感謝の意を表します。

参考文献

- 平成7年度文教白書、我が国の文教施策、文部省、1996。
- 片岡徳雄、喜多村和之編、大学授業の研究、玉川大学出版部、1989。
- 森田保男、大槻博著、実践的・大学教授法、PHP研究所、1995。
- 浅野誠著、大学の授業を変える 16章、大月書店、1994。
- 小林康夫、船曳建夫編、知の技法(1994)、知の論理(1995)、知のモラル(1996)、東京大学出版会。
- 1991年12月度、多摩大学・ボイス(学生の声)調査報告概要、多摩大学VOICE委員会。
- フォーラム・東海大学の自己評価の基本方針および学生による授業評価の信頼性に関するアンケート調査、東海大学教育研究所、一般教育学会誌第16巻第1号、1994年5月。
- 「学生による講義・演習等の評価アンケート」の集計結果に関する概要、大阪経済大学自己点検・自己評価実施委員会、1995。

—資料①—

平成7年度・学生による授業評価集計表

I 授業評価について

問1. 大学の授業を学生が評価することを必要だと思いますか？不必要だとも思いますか？番号に○印をつけて下さい。

項目	人数	%
1. 授業評価は必要である。	49	78
2. 授業評価は不必要である。	0	0
3. いちがいにいけない。わからない。	12	19
4. その他の意見。	2	3

問2. なぜ必要なのか、或いはなぜ不必要なのか、意見を書いて下さい。

- 「1. 必要である」と答えた生徒
 - ・送り手と受け手のキャッチボール(意志の疎通)で、どちら側もより高次な授業が得られると思う。
 - ・教師は生徒を採点するのだから、生徒も教師を採点する権利(必要)があると思う。
 - ・授業に不満を持ったまま単位のために出席するという態度は、ためにならないと思う。
 - ・毎年同じ内容の授業には疑問を感じる。生徒の意見や、時代に即応した内容にすべきだと思われる。
 - ・学生が何を期待し、何を知りたいのかを知る必要があると思う。
 - ・「オレの有り難い話を聞け」という傲慢な先生も多い。教授・助教授と云った肩書きに胡坐をかいている様な先生がやるべきだ。
 - ・先生方の中に、授業に対する緊張感が生まれると思う。
 - ・話を聞いていない学生にインパクトのある授業をすれば、もっと詳しいアンケートが出来る。
 - ・もっと若い人の意見を取り入れ、教師の自己満足的な授業をこわすべきだ。
- 「3. いちがいにいけない。わからない」と答えた生徒
 - ・傷つく先生もいると思う。授業をろくに聞いていないような未熟な学生が、人に対して評価なんて出来ないと思う。
 - ・授業毎の生徒の反応を見れば分かるのでは？
 - ・各個人の批判ばかりになると思う。
 - ・シナリオ等の個人によって考え方に違いの出る授業があって、評価も人それぞれ。正確な判断は難しいと思う。
- 「4. その他の意見」
 - ・日本の大学では意味がない。
 - ・アンケートの結果は、教師だけでなく大学当局にも責任が掛かってくると思う。学生の意見にどこまで応えられるのかどうか…
 - ・学生がどう思っているか知りたい人だけすればいい。
 - ・一年間に教える内容が決まってしまう授業でアンケートを採る必要はないが、学生の知りたいことを教える授業ならやった方がいい。

II. この授業について

(上段:人数 下段:パーセント)

	5	4	3	2	1	得点	無回答
問1. シラバス(授業内容)に沿って予定通り、授業が行われましたか？	0	35	24	2	0	216	2
	0	56	38	3	0	68.6	3
問2. シラバスは記載された授業の目的は、授業の中で明確でしたか？	2	36	23	0	0	223	2
	3	57	37	0	0	71	3
問3. 授業の内容に興味を持ちましたか？	16	29	12	5	0	242	1
	25	46	19	8	0	76.8	2
問4. 教室内の秩序(勉強しようという雰囲気)は保たれましたか？	4	14	31	13	1	196	
	6	23	49	21	2	62	

問5. この授業について良い点、悪い点があれば、次のうち該当する番号にいくつでも○をつけて下さい。

○良い点

項 目	人数	%
1. 丁寧でわかりやすい	26	41
2. ポイントを押さえている	19	30
3. 基礎的なことから説明する	29	46
4. 説明が体系的でまとまっている	13	21
5. 内容に深みがあって教養を感じる	6	10
6. プリント・参考文献の使用が効果的	3	5
7. ビデオ・スライド・OHPの使用が効果的	5	8
8. 雑談やエピソード的な話が面白くなる	32	51
9. 熱意がある	27	43
10. 授業にメリハリ（活気）がある	15	24
11. 人柄や授業に親しみが持てる	23	37
12. 口調が明瞭で聞き取りやすい	49	78
13. その他	5	8

〈良い点のその他の記述〉

- ・外部から監督を招いての対談が良かった。
- ・時間が経つのが早いと思わせる内容で、受講後ヤル気が湧いてくる。
- ・出席カードの裏に書く質問に答えてくれるのは好感が持てる。

○悪い点

項 目	人数	%
1. もっとおしゃべりを注意	9	14
2. 説明をもっと詳しく	8	13
3. 説明がくどく無駄が多い	11	17
4. ポイントがはっきりしない	9	14
5. 説明が体系的でない	6	10
6. 関連事項の説明が少ない	14	23
7. 面白みに欠ける	8	13
8. 自分勝手に進める	8	13
9. 授業が平板で単調	8	13
10. 声小さく聞き取りにくい	0	0
11. 口調が速く聞き取りにくい	0	0
12. 口ごもり聞きづらい	1	2
13. メリハリがない	7	12
14. その他	14	23

〈悪い点のその他の記述〉

- ・黒板をもう少し使ってもらいたかった。
- ・話の部分（エピソード）と講義自体の関連があまり無い。
- ・生徒のモラルの無さに気付いて欲しい。
- ・時間が遅いので多少疲れて集中できなかった。
- ・基礎的講義がながすぎる。役者に対する演出の講義を長くやって欲しい。
- ・声が大きすぎる。
- ・自慢話のように聞こえる時がある。

III. 教師、履修科目の全体評価について

	5	4	3	2	1	得点
問1. あなたにとって、この科目担当の教師の全体的な教育効果をどのように評価しますか。	7	36	14	4	2	231
	11	57	22	6	3	73
問2. 授業内容を中心に考えた場合、この科目は大阪芸大映像学科の他の科目と比較してあなたの親しい後輩が履修するに値する科目だと思いますか。	25	20	11	6	1	251
	40	32	17	10	2	79.7

問3. あなたはこの授業中、どのような態度で臨みましたか？番号に○印をつけて下さい。

項 目	人数	%
1. 真面目に聴講した	26	41
2. たいくつで殆ど寝ていた	6	9
3. 友人と私語していた	6	9
4. 出席カードだけを書きに来た	3	4
5. その他	30	48

問4. この科目にどの程度出席しましたか？

項 目	人数	%
1. 10%以下	1	2
2. 30%前後	3	5
3. 50%前後	8	13
4. 70%前後	40	63
5. 90%前後	10	16
無 回 答	1	2

	5	4	3	2	1	得点	無答
問5. このアンケートの設問は適切でしたか。	7	22	24	7	2	211	1
	11	35	38	11	3	67	2

IV. 授業内容を良くする為の意見があれば遠慮なく書いてください

- ・重要事項は黒板にまとめて欲しい。また、プリントやテキスト、メイキングビデオ等があれば良い。
- ・外部から監督を招いての講義は久々にエキサイトしたので、もっとやるべきだ。
- ・1回生でも受講できるようにして欲しい。（制作1との兼ね合いで）
- ・「こうしては駄目」「これは失敗」と云った否定的な言葉が多いような気がする。これでは無知な我々が鵜呑みにしてしまう危険性があるので、もっと先生の頭を柔らかくして下さい。
- ・面白可笑しい先生の体験談や、思想をもっと聞かせて欲しい。
- ・先生の作品を参考資料として使って欲しい。
- ・疲れがたまる5限目より、3限目などの方が良い。
- ・演出法をその場で実習実演できるようにして欲しい。
- ・「第三の男」だけでなく、最近の演出方法や監督別演出法などを紹介して欲しい。
- ・対話形式の授業にすると、もっと多くの事が学べそう。
- ・もっと広い教室でやって欲しい。
- ・授業内容を確認する意味でも、小テストをして欲しい。
- ・撮影現場でのタブーやモラル無き行動を挙げ、学生に注意を促してほしい。

V. 学生番号・氏名の記入

	人数	%
記入あり	54	86
記入なし	9	14